

方で偽陰性のケースでは真に援助を必要としている子ども達への支援が行われていないことを意味する。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

「Child poverty in Japan: comparing the accuracy of alternative measures」、公的統計のマイクロデータの利用に関する研究集会、統計数理研究所(東京)、2014年11月21日。

「Child poverty in Japan: comparing the accuracy of alternative measures」、AGIセミナー、アジア成長研究所（北九州市）、2014年11月27日。

2. 学会発表

「Child poverty in Japan: comparing the accuracy of alternative measures」、14th International Convention of the East Asian Economic Association、チュラーロンコーン大学（バンコク）、2014年11月1日。

H. 知的所有権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

Ⅱ. 子どもの貧困指標の考察

[1] 経済分野から見る子どもの貧困指標



貧困率の長期的動向： 国民生活基礎調査1985～ 2012を用いて

阿部 彩

国立社会保障・人口問題研究所

- 本報告は、厚生労働省「国民生活基礎調査」昭和61年～平成25年を統計法（平成19年法律第53号）第32条の規定に基づき、厚生労働省の許可を得て個票を二次利用したものです
- 本報告は厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））「子どもの貧困の実態と指標の構築に関する研究」（平成26～28年、研究代表者：阿部彩）の一環として行っています。
- 引用の際には、「阿部彩（2015）「貧困率の長期的動向：国民生活基礎調査1985～2012を用いて」貧困統計ホームページ（www.hinkonstat.net）と明記して下さい。



問題意識

- ・近年、貧困率の上昇率が鈍化傾向にある。
- ・一方で、一番、大変な層の状況は悪化しているのではないか？

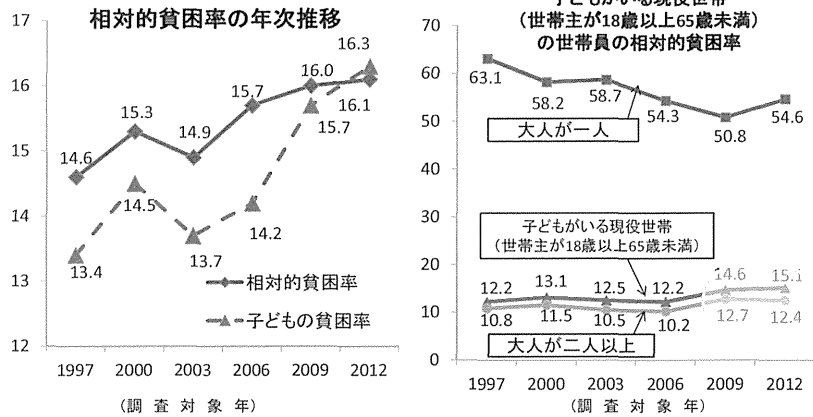


相対的貧困率の推移

○ 最新（2013年調査）の相対的貧困率は、全体で16.1%、子どもで16.3%。一方、大人が一人の「子どもがいる現役世帯」で54.6%。

「相対的貧困率」：所得中央値の一定割合（50%が一般的。いわゆる「貧困線」）を下回る所得しか得ていない者の割合。

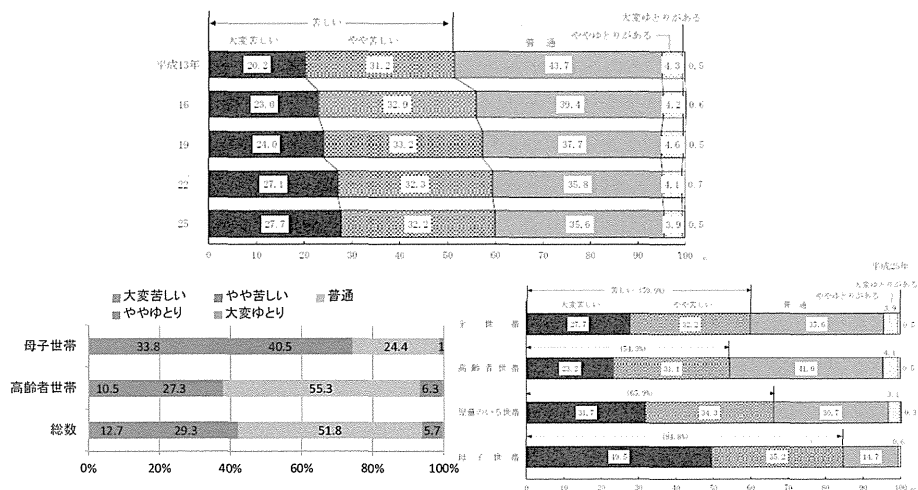
（平成25年国民生活基礎調査の貧困線（所得の中央値の50%）は122万円）



（出典）平成25年国民生活基礎調査（厚生労働省）

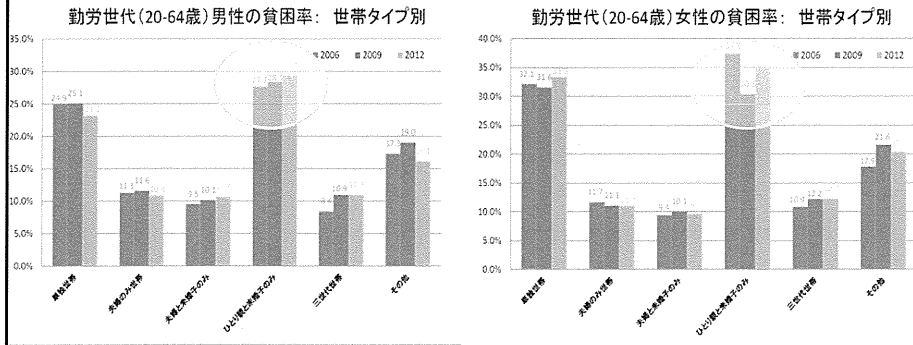
・ 「国民生活基礎調査」では、「大変苦しい」と答える人が増加（「やや苦しい」はさほど増えていない。）母子世帯では、H7(1995)から「大変苦しい」が33.8→49.5%。

図 22 生活意識別にみた世帯数の構成割合の年次推移



勤労世代の貧困率（世帯タイプ別）

- 男性の単独（一人暮らし）世帯の貧困率は若干減少傾向、夫婦のみ世帯はほぼ横ばいとなっている。一方、子どものある世帯の男性の貧困率は上昇している。
- 女性については、夫婦のみ世帯の貧困率がほぼ横ばいという点、三世帯世帯が上昇という点は男性と同様である。単独世帯においては、男性に見られた減少の傾向はなく、横ばいか若干の増加となっており、また、一人暮らしの勤労女性の3分の1（33.3%）が貧困の状態にある。

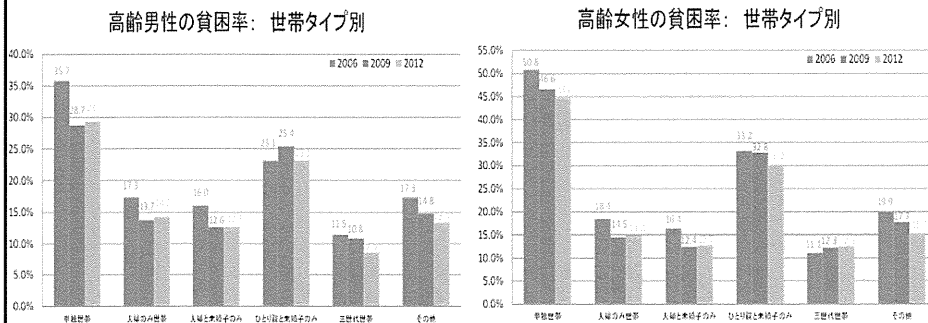


【資料出所】阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ

5

高齢者の貧困率（世帯タイプ別）

- 高齢男性の貧困率は全般的に低下傾向にあり、「ひとり親と未婚子のみ世帯」以外では、どの世帯タイプで見ても、2006年に比べ、2012年の貧困率が減少している。
- 高齢女性の貧困率も全般的には低下傾向にある。「三世帯世帯」以外では、どの世帯タイプで見ても、2006年に比べ、2012年の貧困率が減少しているが、単独（一人暮らし）世帯の貧困率は、4割を超えている。



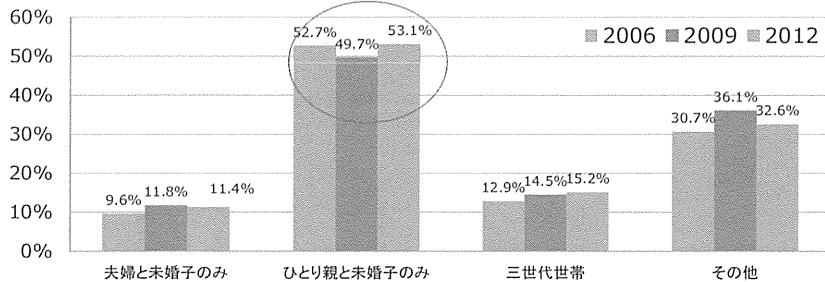
【資料出所】阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ

6



子どもの貧困率：世帯タイプ別

子ども(20歳未満)の貧困率：世帯タイプ別



(注：世帯タイプは、「国民生活基礎調査」の世帯構造による。)

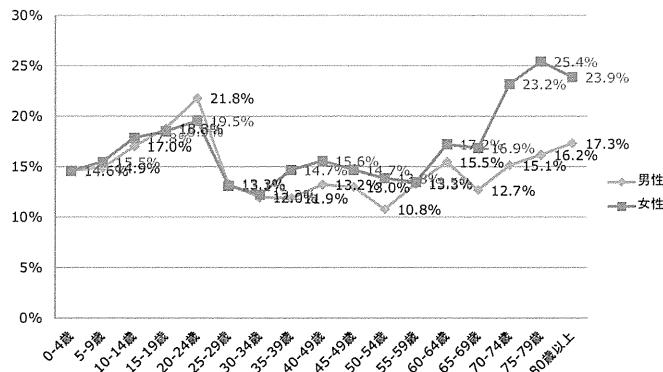
子ども(20歳未満)の貧困率は、2006年から2012年にかけて上昇傾向にあります。2006年から2009年にかけては、「夫婦と未婚子のみ世帯」、「三世帯世帯」の貧困率が上昇した一方、「ひとり親と未婚子のみ世帯」の貧困率は減少しました。しかし、2009年から2012年にかけては、「夫婦と未婚子のみ世帯」の貧困率は横ばいですが、「ひとり親と未婚子のみ世帯」の貧困率は、2006年の貧困率を上回る率となりました。

出所：「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ
(www.hinkonstat.net)



年齢層別、性別 貧困率(2012年)

性別、年齢層別 相対的貧困率(2012)



年齢別、性別に相対的貧困率を見ると、男性においては20-24歳の貧困率が特に高く、25-29歳以降は10-13%で移行し、60-64歳から徐々に増加するものの、80歳以上でも17%台に留まっています。

一方、女性では同じく20-24歳で一つのピークを迎えますが、その後、50-59歳から急激に貧困率が増加し、70歳いじょうでは20%を超える数値が続きます。中年期でも、女性の貧困率は男性よりも高く、35-39歳からは常に女性の方が男性よりも高い貧困率となります。

出所：「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ
(www.hinkonstat.net)





貧困率の長期的動向

・1985~2012年

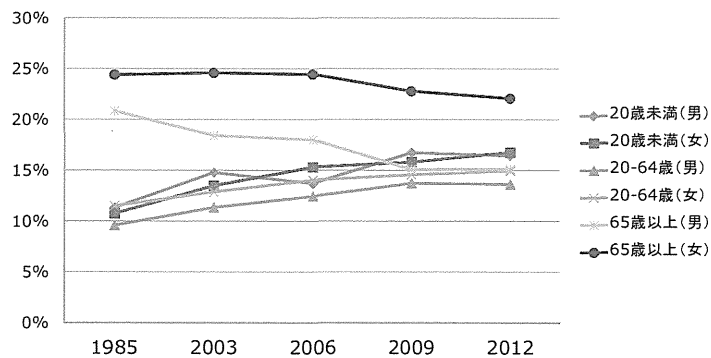
・より長いスパンで見ることにより、何か見えてくるか。

・貧困基準を中央値40%、60%に変化させた場合、異なる動向が見えるか。



年齢3層でみた長期的動向

貧困線=中央値の50%



高齢層(男性)は1985から2009のにかけて大きく減少。高齢女性は1985から2006には変化がないが、その後は減少。

現役世帯の男女はほぼ平行に上昇。

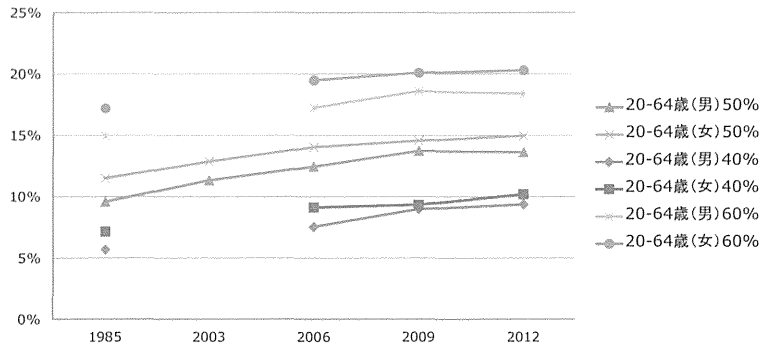
子どもは一番上昇率が高い(男女差はなし)。





異なる貧困線での動向(20-64歳)

20-64歳: 貧困線=中央値の40%, 50%, 60%



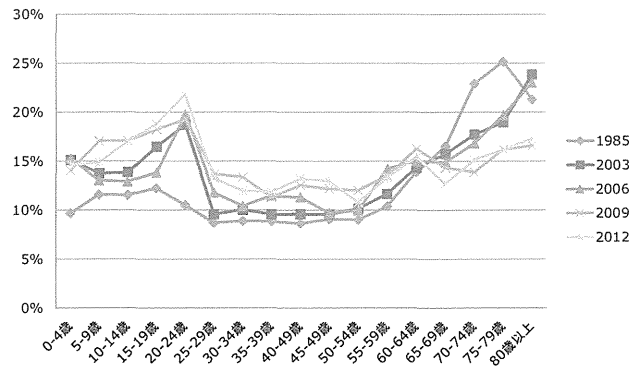
社会全体では、2006年→2012年に15.7%→16.1%で微増。
 勤労世代は、基準を40%, 50%, 60%のどれで見てもこの間ほとんど横ばい。

1985年からは、男性では若干40%-50%間の開きが大きくなっている



貧困率(男性)年齢階層別 : 1985-2012

男性: 年齢階層



明らかな若年期の「山」の出現。近年(2009→2012)も上昇し続けている。

勤労世代期は、85年からは明らかに上昇。近年は落ち着いている？

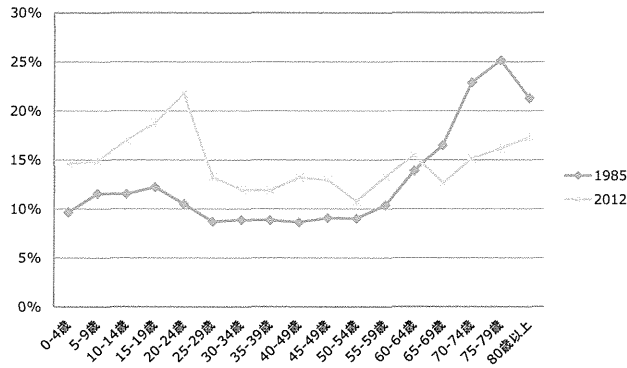
高齢期は、85年からは大きく減少。現在も減少傾向。





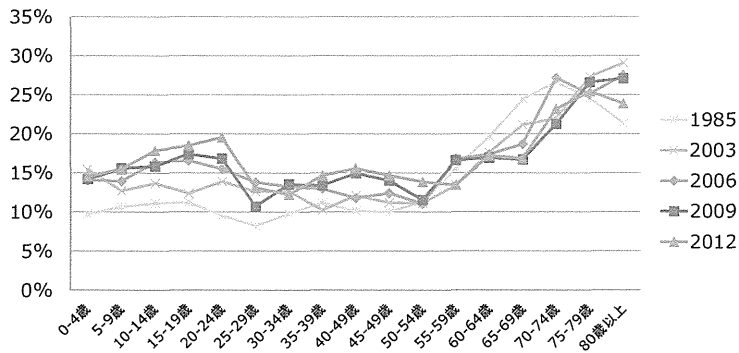
貧困率(男性)年齢階層別

男性：年齢階層別（1985, 2012）



貧困率(女性)年齢階層別： 1985-2012

女性 年齢階層別



女性も若年期の「山」が出現し、現在も増大傾向。

中年期は、1985年に比べれば高い。

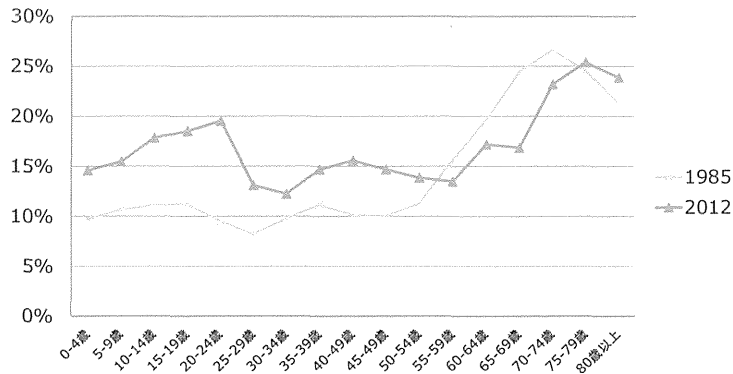
高齢期の貧困率減少は、男性ほど見られない。





女性の年齢層別 貧困率の変化

女性 年齢階層別

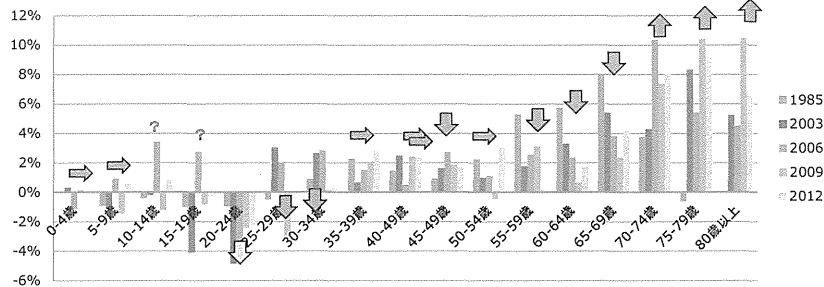


高齢期はむしろ、「貧困化」の時期が遅れるようになった(山の左シフト)。



貧困率のジェンダー格差は縮まったか

貧困率の年齢層別の男女差



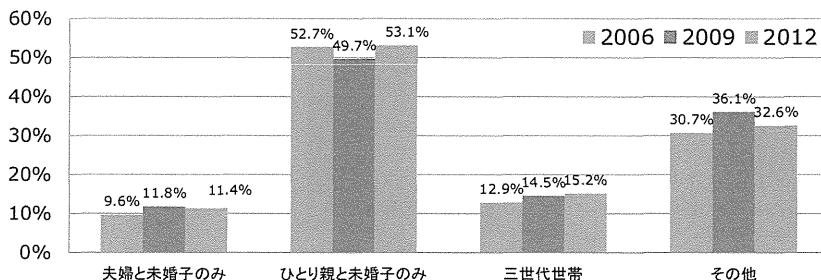
子ども期はそもそも格差がない(はず)。傾向も不明瞭
 20-24歳期は男性のほうが貧困率が高いが、格差が縮小。
 25~54歳は、格差が縮小しているか横ばい。
 55~69歳は、格差が縮小。
 70歳以上は、格差が拡大。





子どもの貧困率：世帯タイプ別

子ども(20歳未満)の貧困率：世帯タイプ別



(注：世帯タイプは、「国民生活基礎調査」の世帯構造による。)

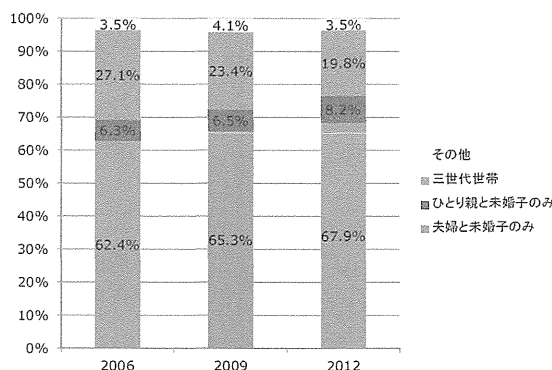
子ども(20歳未満)の貧困率は、2006年から2012年にかけて上昇傾向にあります。

2006年から2009年にかけては、「夫婦と未婚子のみ世帯」、「三世帯世帯」の貧困率が上昇した一方、「ひとり親と未婚子のみ世帯」の貧困率は減少しました。しかし、2009年から2012年にかけては、「夫婦と未婚子のみ世帯」の貧困率は横ばいですが、「ひとり親と未婚子のみ世帯」の貧困率は、2006年の貧困率を上回る率となりました。

出所：「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ (www.hinkonstat.net)



子どもの世帯タイプの変化：2006-2012



2006年から2012年にかけて、三世帯世帯に属する子どもが大幅に減少(-7.3%)しています。その代わりに、「夫婦と未婚子のみ 世帯」の子どもが増加(+5.4%)しました。

「ひとり親と未婚子」も微増(+1.9%)していますが、三世帯世帯の減少の多くは、貧困率が三世帯世帯より低い「夫婦と未婚子のみ」に吸収されており、子どもの世帯タイプの変化が子どもの貧困率の上昇の主原因とは考えられません。

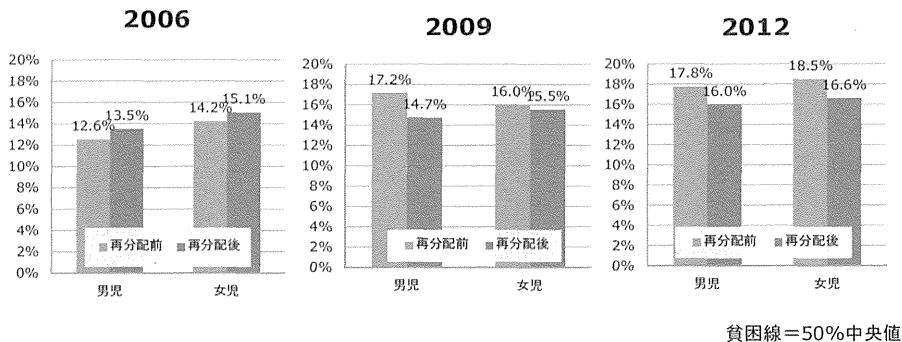
世帯タイプの分布が2006年のまま、各世帯タイプの貧困率が2012年のレベルになったとしても、貧困率は殆ど変わりません。

出所：「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ (www.hinkonstat.net)





子どもの貧困削減に対する再分配効果 再分配前／再分配後の貧困率



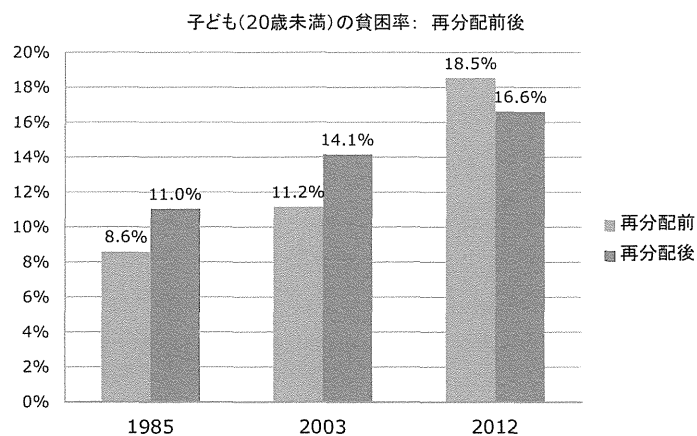
2006年には、再分配後の貧困率の方が、再分配前より高いという「逆転現象」が起こっていますが、2009年には、逆転現象が解消されています。

2012年は、逆転現象は見られませんが、男児では再分配効果が弱まっています。女児では、再分配前の貧困率が上昇したこともあり、再分配効果も高まっています。

出所：「阿部彰(2014)「相対的貧困率の動向：2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ (www.hinkonstat.net)



子どもの貧困率：再分配前後



再分配の逆機能は2006年が最後だが、長期で見ると、再分配前の貧困率が10%も上昇。

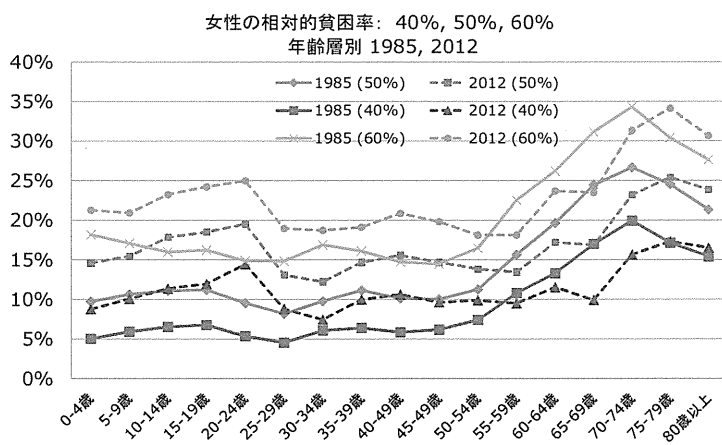




貧困基準40%、60%を用いて時系列の動態を観察する

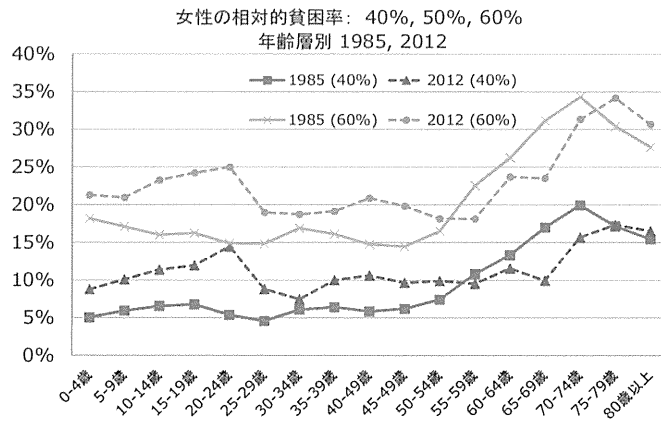


女性の年齢層別貧困率：貧困基準40%、50%、60%





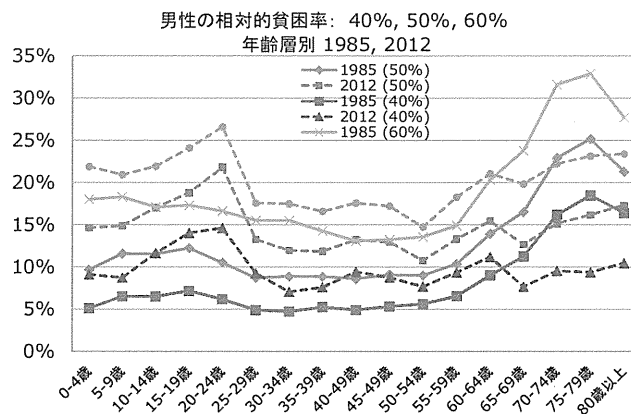
女性の相対的貧困率(40%,60%):1985, 2015



貧困線40%がより厳しい人々。
上昇が大きいのは60%基準のほう。

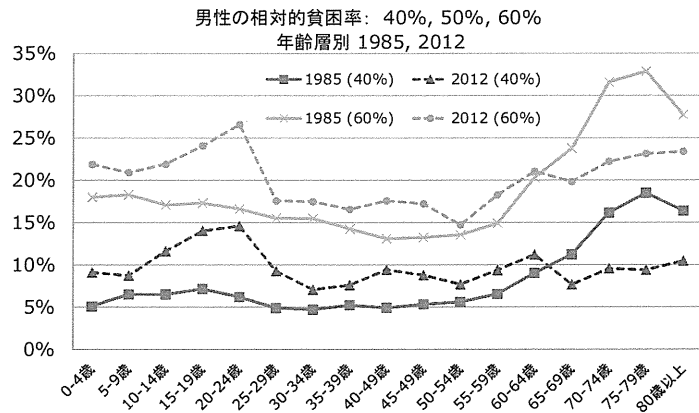


男性の年齢層別貧困率: 貧困基準40%,50%,60%

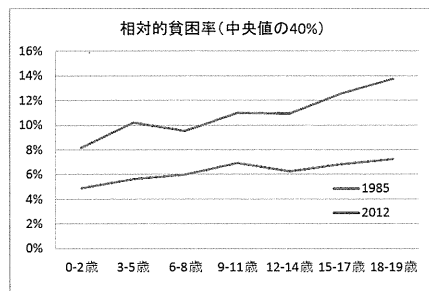
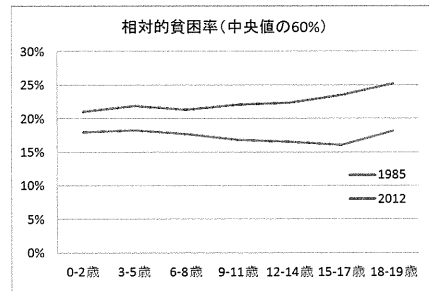
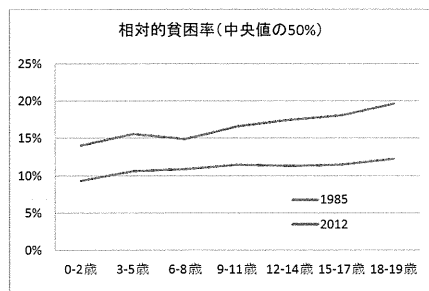




男性の相対的貧困率(40%,60%):1985, 2015



子どもの年齢階層別の貧困率の推移

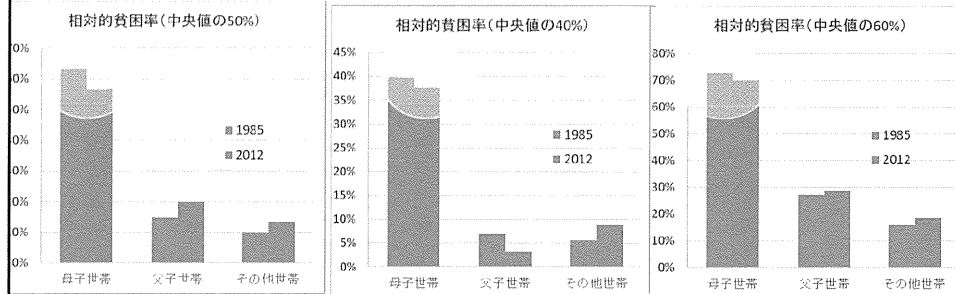


どの指標でも、年齢が高い層ほど85年から2012年の上昇が大きい。
もっとも大きく上昇が表れるのは中央値の40%を貧困線とした場合。60%では上昇が小さい。





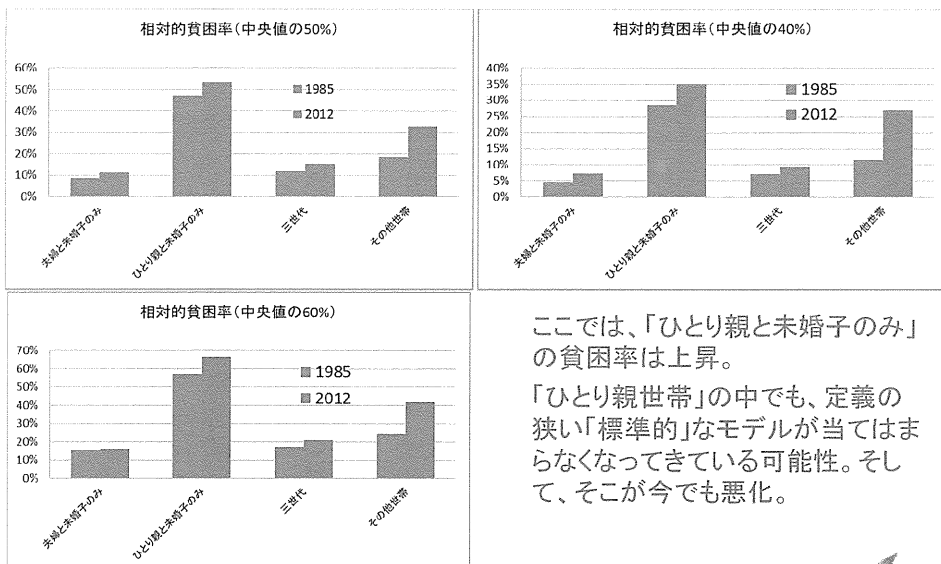
子どもの世帯類型別の貧困率の推移



母子世帯の貧困率が減少したのは共通。
 ここでは50%が一番sensitive。
 父子世帯の動向はunstable（ただしサンプル数が149、52）



子どもの貧困率世帯構造別 貧困率の推移



ここでは、「ひとり親と未婚子のみ」の貧困率は上昇。
 「ひとり親世帯」の中でも、定義の狭い「標準的」なモデルが当てはまらなくなってきている可能性。そして、そこが今でも悪化。

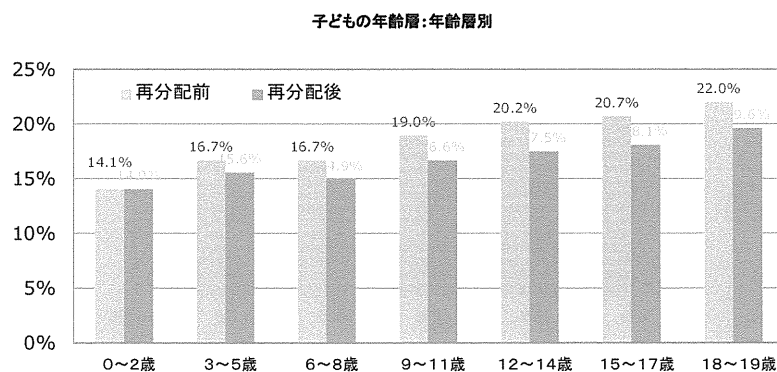




なぜ子ども・若者の貧困率のみ上昇が鈍化しないのか？



子どもの年齢層別 貧困率（2012）



子どもの年齢別に貧困率(再分配後)を見ると、年齢が高いほど貧困率が上昇。

再分配前の貧困率から再分配後の貧困率の差が、政府の所得移転による貧困削減効果ですが、再分配前の貧困率が年齢の高い子どもの方が高く、また、政府貧困削減効果も大きいことがわかります。その結果、再分配前に比べて、再分配後のほうが、子どもの年齢層による格差は小さくなっています。

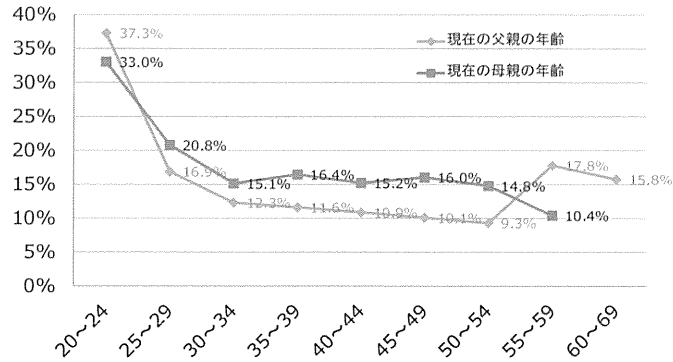
出所:「阿部彰(2014)「相対的貧困率の動向:2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ (www.hinkonstat.net)





父親・母親の年齢層別 貧困率 (2012)

父親・母親の年齢別 子どもの貧困率



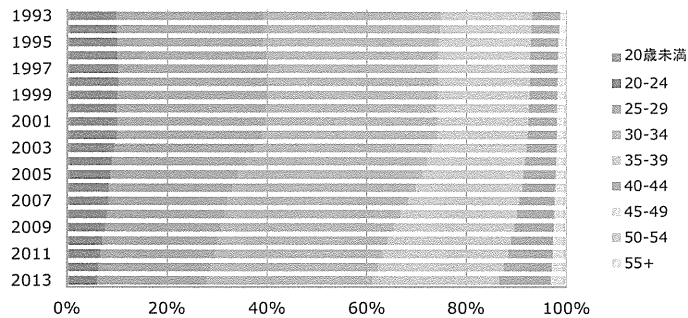
子どもの貧困率は、子どもの年齢よりも、父親の年齢に関係しています。現在の父親の年齢別に見ると、20歳代前半から50歳代後半にかけて、子どもの貧困率は減少します。そして、50歳代後半に再び上昇します。この傾向は、労働市場における男性の状況を反映しています。特に、20歳代前半(20-24歳)の父親を持つ子どもの貧困率が高くなっています。子どもが生まれた時の父親の年齢別に見ると、子どもの貧困率は20歳代前半で高く、30歳代にて低くなっていった後、40歳代で上昇、50歳代前半では非常に高くなっています。

出所:「阿部彰(2014)「相対的貧困率の動向:2006, 2009, 2012年」貧困統計ホームページ



子どもの出生時の父親の年齢

子どもの出生時の父親年齢(嫡出子のみ)



父親の年齢化が進む

子どもの出生時の父親の年齢は、2000年代前半から後半にかけて、20歳未満から20-24歳へと移行している。

出生時の父親の年齢は、1993年時点の出生時の父親年齢が35歳以上から30歳以下へと移行している。

出生時の父親の年齢は、2000年代前半から後半にかけて、20歳未満から20-24歳へと移行している。

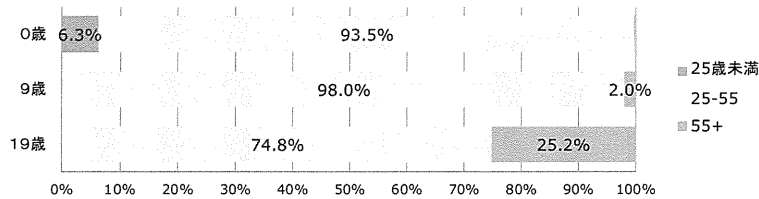
出所:厚生労働省統計情報部『人口動態統計』出生/年





子どもの年齢と父親の年齢

子どもの年齢と父親の(現在の)年齢構成 (2012)

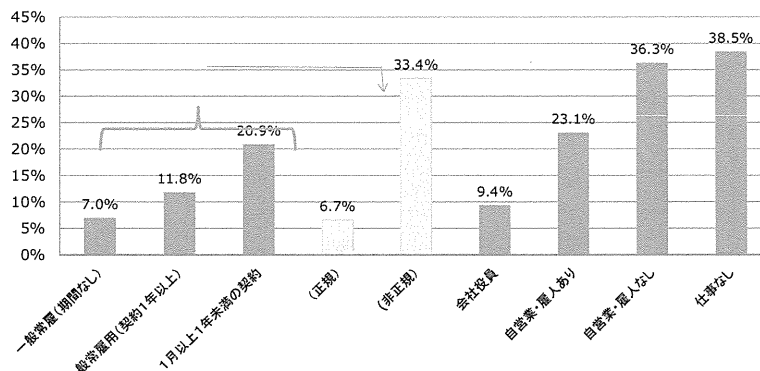


年齢の高い層の子どもは、父親が若年(25歳未満)の割合はゼロだが、父親が高齢(55歳以上)の割合が多い。
 年齢の低い層の子どもは、父親が若年の割合が多く、高齢の割合はゼロ。しかし、子どもの出生時に25歳未満の割合はコホートが若いほど少ない。

出所:厚生労働省統計情報部『人口動態統計』出生/年



父親の就労状況別 子どもの貧困率(2012)



注: (正規・非正規)の区分は、一般常勤(期間定めなし、契約1年以上、1年以上1年未満の契約、日々または1月未満の契約)の雇用者を、勤め先での呼称別に区分し最集計したもの。正規は「正規の職員・従業員」、非正規は「パート、アルバイト、派遣職員、契約職員、嘱託、その他」。
 「日々または1月未満の契約」については、サンプル数が少ないため貧困率は集計していません。

- 一般常勤雇用(期間定めなし)が最も貧困率が低く、雇用者の中では契約期間が短いほど貧困率が高い。
- 勤め先の呼称を基に正規/非正規に分けると、非正規の雇用者の父親を持つ子どもの貧困率は3割を超える。
- 自営業でも貧困率が高く、自営業(雇用者なし)は「仕事なし」と並び4割近い貧困率の高さとなっている。

出所:「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向:2006, 2009, 2012年」貧困統計ホームページ (www.hinkonstat.net)

